

【 論文 】

井上円了の学位論文の原稿をめぐる問題

佐藤厚

1. 問題の所在

1895年（明治28）7月、井上円了（1858-1919）は帝国大学に学位論文を提出し、約10か月後の翌1896年（明治29）6月8日、文学博士の学位を取得した。この学位論文がどのようなものであったかは円了研究において重要な問題であるが、従来、原稿が失われたと考えられていたこともあり研究はほとんど行われてこなかった。

先行研究を概観すると、①1987年、山内四郎は円了の学位論文の審査の過程を明らかにするとともに題目などについて考察した¹。②2011年、三浦節夫は、失われたと考えられていた学位論文の原稿が井上家から寄贈されたこと、そしてそこには後で原稿A、原稿Bと呼ぶ2種の原稿があることを報告した²。これにより学位論文の内容研究の準備が整った。これを受けて③2019年、筆者が、2種の原稿のうちの1種、後に原稿Aと呼ぶものの特徴について円了の『仏教活論本論 顕正活論』との比較を中心とした研究を行い、それが円了の仏教・哲学一致論の完成形であることを指摘した³。

こうした中、課題として、第一に、2種の原稿のうち原稿Bがどのようなもので原稿Aとどう関係するか、第二に、学位論文の題名と考えられるものが3つあるが、この問題をどのように考えるかが残っている。小論ではこの二つの問題に取り組んだ。

2. 井上家から寄贈された原稿について

井上家から寄贈された原稿には2種類がある。ここではそれらを仮に原稿Aと原稿Bとする。三浦の報告をもとにそれぞれの内容を見ると次の通りである⁴。

原稿A（巻末の<図1>参照）

墨で清書された原稿で、「印度哲学論文 仏教哲学系統論 井上圓了稿」と題している。清書は円了の自筆ではない。その清書原稿に、円了が朱や青で加筆している。和紙はタテが28.2cm、ヨコが39.7cmである。一枚に20行、一行に30文字で書かれている。その枚数であるが、362枚、400字換算で545枚に達している。

原稿B（巻末の<図2>、<図3>参照）

円了の自筆原稿である。墨や朱で書かれている。この原稿も和紙であるが、第一の原稿とは大きさがことなる。タテが24.6cm、ヨコが34.4cmである。一枚に20行、一行に約24文字で書かれている。その枚数は100枚である。

原稿Bについて今回筆者が検討した結果、さらに次の三つの特徴があることがわかった。第一に、所々に他の原稿を差し込むためと思われる記号があること（図2）。第二に、文字の大きさの指定のような記号があること（図3）。第三に、「日本仏教哲学系統論」という題目が見えること（図3）である。とくに第三は学位論文の題目の問題とかかわるので重要である。

3. 原稿A『仏教哲学系統論』の内容と意義

まず原稿A『仏教哲学系統論』の内容と意義について述べる。これは既に発表した内容であるが、後に原稿Bを考える際に前提となることであるから再論する。

全体の構成は5巻186章からなる。各巻と簡単な内容を示すと次のようになる。

第1巻 緒論・・・・・・・・・・・・・・・・・・全体の序、哲学略説、宗教略説、
仏教総論

- 第2巻 本論第一 理論宗第一 哲学門・・・・・体象実在論（小乗、空宗、中宗）
- 第3巻 本論第二 理論宗第二 哲学門（続）・・・ 体象関係論（小乗、空宗、中宗）、
体象規則論
- 第4巻 本論第三 理論宗第三 宗教門・・・・・ 仏人実在、関係、規則（小乗、空宗、中宗）
- 第5巻 本論第四 実際宗・・・・・・・・ 禅宗、日蓮宗、浄土諸宗、結論

第1巻 緒論では、序、そして哲学、宗教、仏教それぞれと関係について述べる。第2巻 本論第一 理論宗第一 哲学門では、小乗、空宗、中宗という仏教の三つの立場での、本体と現象の実在に関する捉え方の違いを明らかにする。第3巻は本体と現象の関係、規則に関する捉え方の違いを明らかにする。第4巻 本論第三 理論宗第三 宗教門では、仏と人との関係などについて小乗、空宗、中宗という仏教の三つの立場から論ずる。第5巻 本論第四 実際宗では、哲学には入らない宗派、すなわち禅宗、日蓮宗、浄土諸宗について論じ、最後に結論を述べる。

このように本書は哲学と宗教の立場から仏教の宗派の位置づけを行ったものである。この中、とくに哲学の部分に注目すると、円了によって作られた仏教・哲学一致論の完成形態であるといえる。仏教・哲学一致論とは、円了の創意で、江戸時代までの日本の伝統的な仏教体系（小乗、権大乘、実大乘）と西洋哲学とを合体させる。（『真理金針』、『仏教活論序論』）ことである。例えば、小乗（俱舍宗）は唯物論、権大乘（法相宗）は唯心論、実大乘（華嚴、天台）は唯理論というものである。唯理論が一番高い思想であるが、西洋哲学ではフィヒテやヘーゲルが該当する。これは仏教を西洋哲学の面から、その価値を再評価するものであり、明治初期の廃仏毀釈で沈滞していた仏教界を奮起させたということから、明治宗教史上、重要な思想である。

ところで『仏教活論序論』には真言宗、禅宗、浄土宗、日蓮宗は入っていなかった。そこで1890年（明治23）刊行の『仏教活論本論 顕正活論』（明治23）では、それらを取り入れた体系を完成した。そしてこれをさらに完成させたのが『仏教哲学系統論』である。両著の構成を比較すると＜表1＞のようになる。構成がほぼ同じであることがわかる。さらに分量を比較すると、『顕正活論』が約13万4千文字、『仏教哲学系統論』が約21万7千文字であるから、『系統論』が『顕正活論』の約1.6倍の分量になっている。ここから『仏教哲学系統論』は『顕正活論』を増補して完成させたものであることがわかる。

<表1> 『仏教活論本論 第二 顕正活論』と『仏教哲学系統論』(原稿A)との対照

*原稿A『仏教哲学系統論』の太字部分は原稿Bが残っている部分

『仏教活論本論 第二 顕正活論』 (1890年)	原稿A『仏教哲学系統論』 (1895年)
1 緒論・・・・・・・・・・・・・・・・	■第一卷 緒論
2 哲学総論 端緒 宗教解釈 哲学解釈 帰結	第一篇 総説 第二篇 哲学略説 第三篇 宗教略説
3 仏教総論・・・・・・・・・・・・	第四篇 仏教総論
3-1 理論門・・・・・・・・・・・・	■第二卷 本論第一 理論宗第一 哲学門
緒論・・・・・・・・・・・・	第一篇 総説
体象実在論・・・・・・・・・・・・	第二篇 体象実在論第一 総説 第一篇 体象実在論第二 空宗論 第三篇 体象実在論第三 中宗論 第四篇 結論
体象関係論・・・・・・・・・・・・	■第三卷 本論第二 理論宗第二 哲学門(続)
体象規則論・・・・・・・・・・・・	第一篇 体象関係論
帰結	第二篇 体象規則論
3-2 応用門・・・・・・・・・・・・	■第四卷 理論宗第三 宗教門
端緒	第一篇 総説
善悪苦楽論	第二篇 仏人実在論
迷悟染浄論	第三篇 仏人関係論
応報業感論	第四篇 仏人規則論
帰結	
3-3 通宗門・・・・・・・・・・・・	■第五卷 本論第四 實際宗
端緒	
禅宗・・・・・・・・・・・・	第一篇 實際宗第一 意宗論

日蓮宗・・・・・・・・・・・・・・・・	第二篇 實際宗第二 智宗論
浄土諸宗・・・・・・・・・・・・・・・・	第三篇 實際宗第三 情宗論第一
帰結	第四篇 實際宗第四 情宗論第二
4 結論・・・・・・・・・・・・・・・・	第五編 結論

一方では両者が異なる部分もある。それは冒頭部と結論部の論調である。
 まず冒頭部を比較する。『仏教活論本論 顕正活論』1節（『選集』4:199-220）では、

余かつて『序論』に人世の二大義務を論じて曰く、真理を愛するは学者の努むるところにして、国家を護するは国民の任ずるところなり、国民にして国家を護せざるものは国家の罪人なり、学者にして真理を愛せざるものは真理の罪人なりと。・・・
 （中略）・・・宇宙と国家の二大主義・・・（中略）・・・一国の独立・・・（中略）・・・仏教と国家の関係・・・（後略）

として、「真理を愛するは学者の努むるところにして、国家を護するは国民の任ずる」という「護国愛理」から始めて仏教と国家との関係に至る。これらは悲憤慷慨する文体と相俟って煽情的な色彩が強い。

それに対して『仏教哲学系統論』の場合は論調が落ち着く。

仰きて天文を觀れば森然として羅列し、俯して地理を察すれば雜然として流形するものありて千態万状奇変妙化隱見出沒、実に端倪すべからずと雖も其間に条理の井然として存し規律の秩然として行はるるを見る、一根の草も偶然に生することなく一片の雲も卒爾に滅することなく、・・・一定の理法に従うこと宛も草木の生物一般の規律を履み種子より發育して漸く枝葉を分出し、遂に花実を結成するに異ならず、蓋しライプニッツ氏が・・・ターレス氏が・・・ヘーゲル氏が・・・蓋し哲学は・・・理法系統の存するや疑ふべからずと云ふにあり、抑東洋諸邦中、哲学思想の最も發達したるものを印度となす、・・・此雜然たる仏教について其裏面に含有せる秩然たる理脈を開き來りて仏教哲学の一大系統を明示せんとす、是れ此に仏教系統論を草する所以なり（第一卷 緒論 第一編 総説 第一章 開端）

このように宇宙の理法から始まり、それを明らかにするものとして、西洋では哲学、

東洋では仏教があるとし、その仏教哲学を明らかにするという流れになっている。このように哲学の論文としての議論の積み重ねが行われている。

続いて終結部を比較する。『顕正活論』207節では、

上来数節を重ねて論明したる仏教総論は、仏教中の諸宗諸派の別ありて、おのおのその説を異にするも、これを貫徹する一脈の哲理あることを示すものなり。・・・すでに総論を説き終わりしをもって、これより各論を論述すべし。その分段は左のごとし。

有宗論（小乗俱舍宗ならびに成実宗）

空宗論（権大乘法相宗ならびに三論宗）

中宗論（実大乘天台宗、華嚴宗ならびに真言宗）

通宗論（禅宗、日蓮宗、浄土諸宗）

この順次を追いて各宗の大綱を論明すべし。（『選集』4:370-371）

として「各宗の大綱」の予告で終わっている。

これに対して『仏教哲学系統論』では円了の中心思想である真如論で結んでいる。168章「成仏論」に次のようにある。

六道輪廻の説明は前に既に少しく論述せり、故に此に成仏論の一端を開陳せんとす、物質は勢力より生し、勢力は真如固有の力とする時は真如其物と吾人の心とは互に相通せざるへからず、其心の本体は真如にして、其心の現象は外界なり、而して物心万有に遍在して存する因果の理法は真如其物より発する所の規則ならざるへからず・・・又仏教に善因善果悪因悪果を唱ふるも有形は無形より生し物質は識心より生する説なることを認得するときは善悪因果六道輪廻の説も其道理あることを知るへし、然り而して仏教の成仏論も矢張り此理に外ならず、其所謂成仏とは他にあらず真如其物に同化するを云ふ、今吾人の心は其本源を窮るに皆是れ真如より分出せる一部分一分子にして真如と同体なれば之をして真如に還元同化せしむるも何ぞ敢て難きの理あらんや、・・・故に吾人若し絶対真如の方に向て其道を求むれば是れ所謂出世間道にして成仏すへき道なり、是の中に、理論宗にありて、哲学門に於て真如の實在を説き直ちに宗教門に於て之に体達せんことを説く所以なり。

このように『仏教哲学系統論』は『仏教活論序論』、『仏教活論本論顕正活論』を発展させた仏教・哲学一致論の完成形態として完結した論文であるといえる。

4. 原稿 A と原稿 B の関係

続いて原稿 A 『仏教哲学系統論』と原稿 B との関係について考察する。原稿 B は原稿 A 『仏教哲学系統論』の一部分に対応する。それは前に示した<表 1>の原稿 A 「第二巻 本論第一 理論宗第一 哲学門」である。ところで原稿 B は中間部が欠落した、前半部と後半部からなる。前半は第 34 章から第 61 章までの全 28 章で、内容は外道、俱舎宗、法相宗であり、後半は第 87 章から第 102 章の全 16 章で、内容は天台宗、華嚴宗、真言宗である。中間にあるべき 62 章から 86 章までの 25 章が欠けている。

以下、内容を前半部と後半部に分けて見ていく。

(1) 前半部

原稿 A と原稿 B 前半部の章立て対照させると<表 2>のようになる。

<表 2> 外道、俱舎宗、法相宗の部分の対照

原稿 A	原稿 B
第 34 章 各宗ノ論目	
第 35 章 外道諸宗	第 34 章 外道諸宗
	第 章 数論勝論大意 (* 章番号なし: 筆者註)
	第 37 章 勝論大意
第 36 章 小乗諸部	第 38 章 小乗諸部
	第 章 俱舎宗大意 (* 章番号なし: 筆者註)
第 37 章 俱舎宗述意	第 39 章 俱舎宗述意
	第 40 章 俱舎宗客観論第一 物質論一
	第 41 章 俱舎宗客観論第一 物質論二
第 38 章 俱舎宗万法論第一 世界論	第 42 章 俱舎宗客観論第二 世界論一
第 39 章 俱舎宗万法論第二 法体論	第 43 章 俱舎宗客観論第二 世界論二

	第 44 章 俱舍宗客観論第二 世界論三
	第 45 章 俱舍宗客観論第二 世界論四
	第 46 章 俱舍宗客観論第三 人類論
第 40 章 俱舍宗識心論	第 47 章 俱舍宗主観論第一 心象論一
	第 48 章 俱舍宗主観論第一 心象論二
	第 49 章 俱舍宗主観論第二 心体論
	第 50 章 俱舍宗主観論第一 法体論
第 41 章 俱舍宗無為論	第 51 章 俱舍宗本体論第一 無為論
第 42 章 俱舍宗結意	第 52 章 俱舍宗結意
第 43 章 成実宗大意	(第 53 章, 第 54 章なし：筆者註)
第 44 章 法相宗述意	
第 45 章 法相宗万法論	第 55 章 法相宗客観論第一 物質論
	第 56 章 法相宗客観論第二 人類論
	第 57 章 法相宗客観論第一 心象論
第 46 章 法相宗識心論第一 識心ノ種類	第 58 章 法相宗主観論第一 心体論一
第 47 章 法相宗識心論第二 識心作用	第 59 章 法相宗主観論第一 心体論二
	第 60 章 法相宗主観論第一 心体論三
	第 61 章 法相宗主観論第一 心体論四
第 48 章 法相宗無為論	
第 49 章 法相宗教相論	

ここから次のことを指摘できる。第一に、原稿 A よりも原稿 B の構成が細かくなっている。章立てでいうと、原稿 A が 35 章から 49 章までの全 14 章なのに対して、原稿 B は 34 章から 61 章までの全 27 章となっている。第二に、分量も原稿 A よりも原稿 B が増えている。このことを「外道諸宗」の部分の記述で確認する。〈表 3〉は原稿 A と原稿 B とを対照させたものである。

〈表 3〉外道諸宗の部分の対照

	原稿 A	原稿 B
	第 35 章 外道諸宗	第 34 章 外道諸宗

①	<p>斯クシテ向上門第一線即チ俱舎宗ノ哲理ヲ考フルニ當リ、其論主觀的物体哲学ナレバ先ツ外道諸派ノ客觀的物体哲学ヲ述ブルヲ要ス、</p>	<p>斯クシテ向上門第一線即チ俱舎宗ノ哲理を考フルニ當リ、其論主觀的物体哲学ナレバ先ツ外道諸派ノ客觀的物体哲学ヲ述ブルヲ要ス、</p>
②		<p>仏教ニテハ諸派ノ哲学ヲ呼ヒテ外道ト称ス、其意邪説邪教ヲ義トスルモノノ如シ、俱舎光記云、(略)、或ハ浄名義抄云、(略)、或ハ華嚴經随疏演義鈔ニハ(略)トアリ、是レ仏教ヲ以テ独リ正理正道トナシ自余ノ諸法ハ尽ク邪教邪説トナス、而シテ外道諸派中、仏教ニ近キモノナキニアラス、故ニ大藏經雜著部門ニ金七十論三卷(三藏法師玄奘訳)及勝宗十句義論一卷(陳天竺三藏真諦訳)ヲ出セリ、若シ仏教經論中ニ外道ヲ説クモノ左ノ諸書ナリ、涅槃經、入楞伽經、梵網六十二見經 (以下略)</p>
③	<p>第一ニ小乘四宗論ニ挙クル外道四宗ハ僧佉、毘世師、尼犍子、若提子ヲ云ヒ、</p> <p>第二ニ華嚴經疏ニ出ツル外道四見ハ左ノ如シ、 (引用原文略)</p> <p>第三ニ、瑜伽師地論ニ常道、辺無辺論、不死矯乱論、無因見論ノ外道論ヲ出セリ、其説明左ノ如シ、 (引用原文略)</p> <p>第四ニ、陀羅尼集經並ニ翻譯名義集ニ掲クル外道六師ハ左ノ如シ、</p>	<p>此ノ如ク其類多シト雖モ、成唯識論ニ(略)外道小乘四宗論ノ四種トハ</p> <p>一、僧佉論師説、二、毘世師論師説、三、尼乾子論師説、四、若提子論師説 是ナリ、</p> <p>外道小乘涅槃論ノ二十種トハ (略)</p> <p>是ナリ、次ニ大日經住心品ノ三十種トハ、 (略)</p> <p>是ナリ、次ニ九十六種ノ外道ノコトハ・・・</p>

	<p>(引用原文略)</p> <p>第五ニ、演義鈔ニ外道ニ九種ノ邪見ノ迷執アルコトヲ示セリ、(以下略)</p> <p>其他唯識論ハ六十二見、智度論ノ九十五種外道ノ諸派、枚挙ニ違アラズ、</p> <p>以上挙示スル所ニハ重複セルモノ多キモ参考ノタメ諸書ニ散見セル名称ヲ列記セリ、其中ニハ種々ノ異論アレドモ</p>	
④		<p>第 章 数論勝論大意(* 章番号なし:筆者註)</p> <p>大日經住心品ノ・・・</p>
⑤		<p>第 37 章 勝論大意</p> <p>次ニ勝論ハ・・・・</p>
⑥	<p>之ヲ仏教ニ対比シテ其哲学上ノ位置ヲ定ムルトキハ客観論、或ハ唯物論、或ハ実体哲学即チ客観的物体哲学ニ属スルモノ最モ多シトス、</p> <p>然ルニ俱舎ハ此客観的ヨリ唯心論ノ方ニ向テ一步ヲ進メタルモノナレバ、余ハ之ヲ主観的物体哲学ト称スルナリ、若シ又仏教ノ上ヨリ之ヲ視レバ外道諸派ハ皆実我実法論ニシテ、仏教ハ之ニ対シテ無我論ナリト謂フヘシ、</p>	<p>第 38 章 小乗諸部</p> <p>斯クシテ外道諸派、之ヲ仏教ニ比スルニ物体哲学、或ハ客観的物体哲学ニシテ、仏教中小乗ハ主観的物体哲学ナリ、而シテ勝論ノ如キハ二元論、和合論、存立論タルニ於テ、小乗ト殆ント其ノ主義ヲ同ウセリ故ニ、之ニ一步ヲ加レハ仏教トナルヘシ、是レ亦論理発達ノ順序ト謂フテ可ナリ、</p> <p>夫レ小乗ハ・・・・</p>

原稿 A をみると①では、哲学上、俱舎宗の教理との関連性から外道を論ずる必要があるという、外道を論ずる理由を説いている。③では『小乗四宗論』など五つの文献を挙げて外道の種類を述べ、⑥で、それら外道は仏教との対比では客体的物体哲学であると述べる。これに対応する原稿 B を見る。①は原稿 A と同じである。続いて

②では外道という名前の定義について『俱舍光記』などを挙げる。そして③では仏教典籍の中で外道を説くものとして『外道小乘四宗論』などを挙げる。これは原稿 A と同じ趣旨の部分であるが文献が異なっている。さらに④⑤は原稿 B 特有の部分で、④では印度哲学の数論（サーンキヤ）学派について、⑤では同じく勝論（ヴァイシェーシカ）学派について詳しく内容を紹介する⁵。最後に⑥は小乗諸部の章に入るが、外道を仏教との対比の中で客観的物体哲学としているところは同じである。

このように内容面で原稿 A よりも B のほうが多くなっている。もし原稿 B が原稿 A に先行するものならば、原稿 A は原稿 B を簡略にしたものに見える。

(2) 後半部

続いて後半部について、原稿 A との対照を示すと<表 4>のようになる。

<表 4>原稿 B 後半部：天台宗、華嚴宗、真言宗の部分

原稿 A	原稿 B
第 60 章 天台宗述意	
第 61 章 天台宗教相論	
第 62 章 天台宗有空論	
第 63 章 天台宗中道論	第 87 章 十界互具論 第 88 章 一念三千論 第 89 章 一心三觀論
第 64 章 天台宗結意	
第 65 章 華嚴宗述意	
第 66 章 華嚴宗教相論	第 92 章 教相論（五教論及十宗論）
第 67 章 華嚴宗有空論	第 93 章 原稿
第 68 章 華嚴宗中道論	第 95 章 中道論（十玄論及六相論）
第 69 章 華嚴宗結意	
第 70 章 真言宗述意	
第 71 章 真言宗教相論	第 96 章 教相論 第 99 章 二教 十住心論
第 72 章 真言宗有空論	第 100 章
第 73 章 真言宗中道論	第 101 章

原稿 A は天台宗、華嚴宗、真言宗のそれぞれについて、述意、教相論、有空論、中道論、結意という 5 項目の構成により記述されている。これに対して原稿 B は章の名前が様々である。教相論というものもあれば、十住心論という典籍名を挙げる場合、十界互具という術語を挙げている場合もある。

この中、原稿 A 第 63 章 天台宗中道論をもとに対応を考察する。対応する原稿 B は第 87 章 十界互具論、第 88 章 一念三千論、第 89 章 一心三觀論である。両者を比較すると、原稿 A では天台の教理について十如是、空仮中の三觀、一念三千の順で説明されている。原稿 B ときちんと対応はしないが、B でいえば、順序は逆に一心三觀論、一念三千論、十界互具論の順になっている。

全体にわたり原稿 B はメモ書きのようなものが多い。そして前に提示した<図 2>にあるように、所々で他の原稿を差し込む表示がある。ここから、もし原稿 B が原稿 A の下書きだとすれば、原稿 B を拡大補充して原稿 A になったとも思われる。

(3) 小結

以上のことを整理すると次のようになる。

第一に、原稿 B は原稿 A の一部分（「第二卷 本論第一 理論宗第一 哲学門」）に対応する。第二に、原稿 B は、前半（35 章から 61 章）と後半（87 章から 102 章）に分けられ、中間の 62 章から 86 章までは欠落している。第三に、原稿 B 前半部と原稿 A とを比較すると、原稿 B のほうが章立てが細かく分量も多くなっている。第四に、原稿 B 後半部と原稿 A とを比較すると、原稿 B のほうは構成が整っておらず、メモ書きのような体裁が多い。第五に、では原稿 A と B はどのような関係と考えられるか。一つは、原稿 B が原稿 A の草稿の可能性である。原稿 B の前半と後半で細かさに濃淡があるのもそのせいと思われる。ただ、もう一つ別の可能性として、原稿 B はこれ単独で刊行する計画もあったのではないか。その根拠として、<図 3>にあった題目が書き込まれた部分の文字の大きさの指定などはこれ自体での刊行を意識したのではないかと考えられる。現時点では結論は出ないので、さらに内容の詳細な比較を行った後にもう一度考えたい。

5. 題名の問題——『仏教哲学系統論』、『日本仏教哲学系統論』、『日本仏教系統論』

最後に、現在まで3つ挙げられている学位論文の題名の問題について、研究史をたどりながら考えたい。

(1) 仏教哲学系統論

1987年、円了の学位論文について最初に研究した山内四郎は、学位論文の題名を「仏教哲学系統論」と見た⁶。その根拠は、学位を受けた翌年の1897年（明治30）に刊行された『外道哲学』緒言の記述である。そこで円了は次のように述べる。

余、多年哲学上、日本仏教の組織系統を撰述せんと欲し、力をこれに用うるや久し。近日、ようやくその体系を完成し、これを「仏教哲学系統論」と題し、まずその第一編すなわち『外道哲学』を印行して、ここに世に公にするに至る⁷。

円了は続いて日本仏教の組織系統の研究の意味について述べた後、刊行計画として、第一編 外道哲学から第十五編 日宗哲学に至るまでの計画を述べている。

引用文で円了が述べた「仏教哲学系統論と題する」ものが学位論文なのかどうかは明確ではない。しかし山内は、続いて示される『外道哲学』以下の刊行計画から、推測の域を出ないとしながらも「仏教哲学系統論」が学位論文の題目ではないかと慎重に結論を下している。

(2) 日本仏教系統論

2011年、三浦節夫は井上家から寄贈された学位論文の原稿を紹介する論文「博士論文『仏教哲学系統論』について——井上家から寄贈された原稿をめぐって」を『井上円了研究センター年報』20号に書いた⁸。この中では山内四郎の論文と「仏教哲学系統論」という題目も紹介している。そして原稿（原稿A）を見た結果、最初の部分に「印度哲学論文 仏教哲学系統論 井上円了稿」（本論文の<図1参照>）とあることから、論題は「仏教哲学系統論」であり、それが後に朱筆で「日本仏教系統論」に直したものと述べている⁹。つまり本来は「仏教哲学系統論」、修正後が「日本仏教系統論」と解釈したのである。

(3) 日本仏教哲学系統論

2016年、三浦節夫は『井上円了—日本近代の先駆者の生涯と思想』を刊行し、その中の第三章第六節に、2011年の『井上円了研究センター年報』の内容である「博士論文『仏教哲学系統論』について—井上家から寄贈された原稿をめぐって」を載せた¹⁰。内容は『井上円了研究センター年報』ほとんど同じであるが、補注で題名に関する新しい情報を述べている。

それは1937年（昭和12）に刊行された『東洋大学創立五十年史』「井上円了先生略年譜」の中に出る「日本仏教哲学系統論」という題目である。そこには次のようにある。

明治二十七年八月鎌倉成就院の小庵にて『日本仏教哲学系統論』を草し、田中治六、田中善立二氏、之が筆録に当る。但し之れ学位請求論文たり¹¹。

しかし、これに関連して1939（昭和14）に刊行された円了の弟子、高島米峰の『随筆人』には、「先生の学位論文『仏教哲学系統論』の一部分である『外道哲学』を見ても」¹²という記述があり、ここでは「仏教哲学系統論」となっている。このように題名に問題があることを述べている。三浦自身は、前に挙げた『外道哲学』緒言に加え、「しかし、同書（『外道哲学』のこと。引用者補）の冒頭で、哲学館が明治二九年（一八九六）一二月に火災に遭い、参考書類を焼失・散失したと言っている」¹³と述べ、題目が『仏教哲学系統論』であったろうと述べている。

この「仏教哲学系統論」、「日本仏教系統論」に続く、いわば第三の題目である「日本仏教哲学系統論」は円了の伝記である1974年に刊行された平野威馬雄『伝円了』（p.371）や1982年に刊行された伊藤友信編『近代日本哲学思想家辞典』（p.58）でも用いられている。これらは『東洋大学創立五十年史』をもとにしたものであろう。

ところでこの「日本仏教哲学系統論」に関連して、筆者は最近二つの発見をした。第一に、2019年に発見したもので、1937（昭和12）7月23日に刊行された『東洋大学新聞』145号の記事である。ここに中国哲学者で、井上円了についても思い入れが強かった柴田甚五郎¹⁴（1881-?）が哲学堂で学位論文を発見した記事が掲載されている。見出しには、

「柴田教授の功績 散逸した学祖の学位論文を発見 輝く「日本仏教哲学系統論」

とある。貴重なので記事を転載する。

学祖井上円了博士が、我が国最初の学位請求論文によつて認可された文学博士であることは周知の通りであるが、不幸にも其論文は未完のまゝ大正 12 年の大震災に遭遇し焼失してしまった。それと同時に文部省と東京帝大図書館とに各一部づゝ保存されてゐたものも烏有に帰してしまつた。爾来その論文を他から発見しようとすることは学祖に関心を持つ者の常に心がけられて来たところであるが、遂に今回柴田甚五郎教授によつて発見され、学界にその功績絶賛されてゐる。

柴田教授は去る七月四日、学祖の霊とこしへに眠る哲学堂に詣でその際ふとしたことから堂内より論文を発見せるに至つたのである。実に之は柴田教授十数年の苦心の報ひられたものであつて本学関係者はもとより広く学界にその功績は絶賛されてゐる。

続いて柴田甚五郎の声を紹介している。

この論文の原本は八(?)章より成るもので、その題は爾来信じぜられてゐたのと違つて「日本仏教哲学系統論」となつてゐる、これは井上先生三十九歳の時の発表であつて先生はこれによつて文学博士となられたのである。その二大眼目ともいふ可き事は日本仏教の中に西洋哲学にはるかに優(?)る哲学の存在する事を証明された事及び仏教研究の方法に一新紀元を画された事である。

之が発表されるや学界に及ぼしたる影響は頗る大なるものがあつたが、不幸にして未だ刊行されてゐない。私は此の学祖の博士論文たる「日本仏教哲学系統論」と学士論文たる「読荀子」を合して今秋、本学開学五十周年記念の時に於いて出版してみたいと思つてゐる。実に好い時期に発見された。洵に喜びに耐へない次第である。

ここで重要なのは、第一に内容が 8(?)章からなるとされること。実はこの数字は滲んでいて 8 かどうかは確実ではない。第二に題目が「日本仏教哲学系統論」であること。柴田は「爾来信じぜられてゐたのと違つて」と述べているが、それは「仏教哲学系統論」を指すと思われる。第三に柴田が、東洋大学創立 50 周年に合わせて、学位論文と学士論文とを合わせて出版したいと考えていたことである。

第一の章の数については、もし8章であれば、5巻186章からなる原稿Aとは合わないが、この数字がどうかさらに検討しなければならない。第二の題目についてはすぐ次に述べる。そして第三の刊行計画は、理由はわからないが現在伝わっていないところから見て、おそらく実行されなかったのであろう。

これが同年に刊行された『東洋大学創立五十年史』の記述につながるのだと思う。柴田も『東洋大学創立五十年史』の編集委員に加わっていたことから、その可能性は高いと考えられる。

続いて2020年に発見したのは原稿Bの記述である。〈図3〉を見ると、「日本仏教哲学系統論」と明記してある。ここから「日本仏教哲学系統論」が実在したことが確認できたのである。すると柴田が哲学堂から発見したのは現在では一部しか伝わらない原稿Bの完本ではなかったか。

以上、学位論文の題名には、①仏教哲学系統論、②日本仏教系統論、③日本仏教哲学系統論の3種類があることがわかったが、問題はこれらの関係である。①と②の関係は、三浦が言うように提出時と修正時の違いと考えられるが、③はこれらとどのように関連するのか。そもそも、どうして円了は、学位論文を修正までしておきながら刊行しなかったのかなど、謎がいろいろと浮かんでくる。これについては今後も考えていきたい。

6. 結語

小論では1895年に提出された井上円了の学位論文を考察した。先行研究においては、①審査の過程、②逸失したと思われた原稿が井上家から2種類寄贈されたこと、③2種の原稿のうちの1種、ここで原稿Aと呼んだものの特徴について『顕正活論』との関係で研究がなされ、原稿Aが円了の仏教・哲学一致論の完成形であることが指摘された。

本論では、①原稿Bと原稿Aとの関係、②題名の問題の考察を行った。

①は、原稿Bが原稿Aの一部分に対応すること。内容は中間が欠落した前半と後半に分かれること。前半部は原稿Aの相当部分よりも細かく分量が多いこと。反対に後半部はメモ書きのような部分が多いこと。原稿Bは原稿Aの下書きの可能性と共に、原稿B自体での刊行という二つの可能性が考えられた。

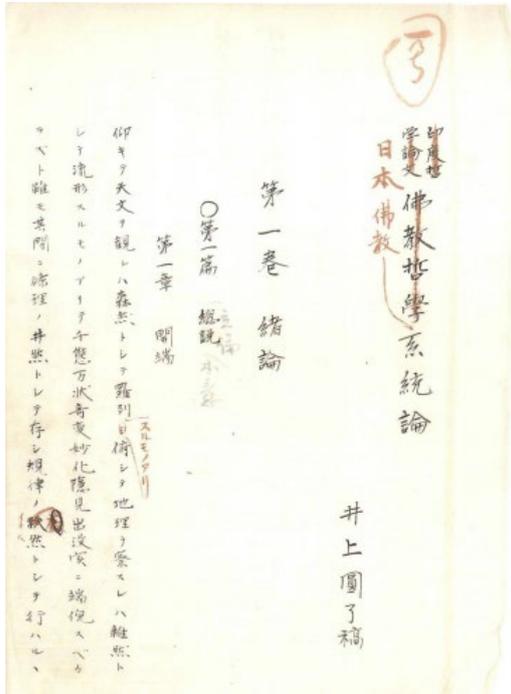
②は、「仏教哲学系統論」（『外道哲学』緒言）、「日本仏教系統論」（原稿 A）、に加えて「日本仏教哲学系統論」（『東洋大学創立五十年史』）という証言がある中、「日本仏教哲学系統論」について新たな証拠 2 つを提示した。

最後に、現段階での博士論文準備から『外道哲学』刊行までの流れを推測してみる。1894年の夏、円了は博士論文の執筆に取り組んだ（原稿 B の可能性①）。1895年に「仏教哲学系統論」として提出。翌86年、学位取得とともに刊行の準備に入り、題目を「日本仏教系統論」に変更し内容も修正した（原稿 A）。しかし加筆していくうちに当初の計画よりも大部なものを構想するようになった（原稿 B の可能性②）。やがて1冊ではなく『外道哲学』をはじめとする10数冊のシリーズを構想するようになった。さらに12月には郁文館の火事に巻き込まれ、多くの資料が失われた。そこで87年に『外道哲学』だけが刊行された。

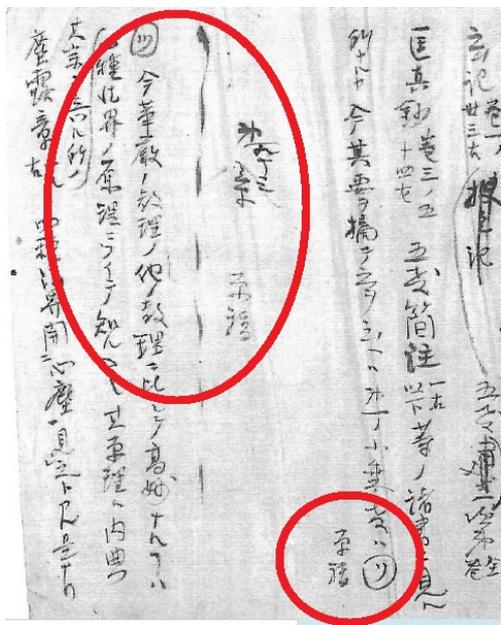
今後も原稿 A、B の翻刻を行いながら、改めてこの流れを検討していきたい。

資料：井上円了略年表

年	井上円了	その他・一般事項
安政5 (1858)	生誕	
明治元 (1868)		明治維新
6 (1873)		キリスト教解禁
10 (1877)	東本願寺教師教校入学	
14 (1881)	東京大学哲学科入学	
18 (1885)	東京大学卒業	
19 (1886)	『真理金針』、『哲学一夕話』、『哲学要領』	
20 (1887)	哲学館創設 『仏教活論序論』、 『仏教活論本論第一 破邪活論』	
22 (1889)		大日本帝国憲法発布
23 (1890)	『仏教活論本論第二 顕正活論』	教育勅語発布
25 (1892)	『真宗哲学序論』	
26 (1893)	『禅宗哲学序論』	
27 (1894)	夏、博士論文執筆	日清戦争
28 (1895)	『日宗哲学講義』★学位論文提出	
29 (1896)	★6月 文学博士学位取得	
30 (1897)	『外道哲学』	
31 (1898)	『大乘哲学』(*刊行は明治38年)	
34 (1901)		村上専精『仏教統一論』
35 (1902)	第二回海外視察、哲学館事件	
37 (1904)	『仏教通観』	日露戦争
39 (1906)	哲学館大学から引退。修身教会運動開始。	
42 (1909)	『哲学新案』	
45 (1912)	『日本仏教』	
大正6 (1917)	『奮闘哲学』	
8 (1919)	逝去	

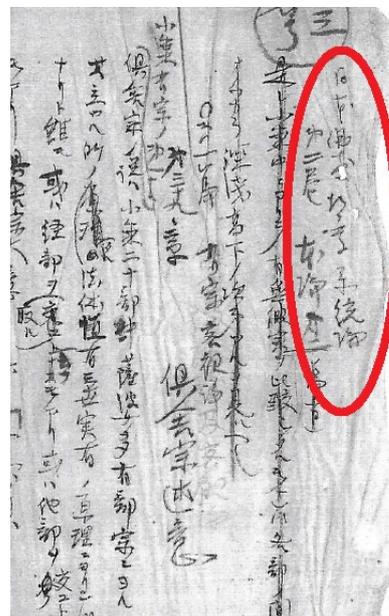


<図1> 原稿 A



<図2> 原稿 B

○で囲んだ部分に「原稿」という文字と、いろは順の文字がツ、ツが見える。



<図3> 原稿 B

○で囲んだ部分に「日本仏敎哲學系統論」が見える。その上に「三号」という文字の大きさの指定が見える

参考文献

1. 一次資料

井上円了『仏教哲学系統論』(未刊)

同 『仏教活論本論 顕正活論』(『井上円了選集』第四卷)

同 『外道哲学』(『井上円了選集』第二二卷)

2. 二次資料

2-1 単行本

三浦節夫『井上円了—日本近代の先駆者の生涯と思想』(教育評論社、2014年)

2-2 論文

佐藤厚「井上円了における伝統仏教体系と仏教・哲学一致論」(東洋大学東洋学研究所『東洋学研究』50、2013年3月)

三浦節夫「井上円了の博士論文『仏教哲学系統論』について—井上家から寄贈された原稿をめぐって」(『井上円了センター年報』20、2011年)

山内四郎「井上円了の学位に就いて(訂補)」『井上円了研究』5、97-100、1986年

同 「井上円了の学位に就いて」『井上円了の思想と行動』1987年

注

¹ 山内四郎「井上円了の学位に就いて」(『井上円了の思想と行動』1987年)。

² 三浦節夫『井上円了の博士論文『仏教哲学系統論』について—井上家から寄贈された原稿をめぐって』(『井上円了センター年報』20、2011年)。

³ 2019年6月に行われた日本近代仏教史研究会にて博士論文の内容とその意義について発表した(「井上円了の学位論文『仏教哲学系統論』の内容と意義—井上家に残された清書原稿を元に—」)。

⁴ 三浦節夫『井上円了の博士論文『仏教哲学系統論』について—井上家から寄贈された原稿をめぐって』、前掲論文、78頁。

⁵ この数論と勝論についての詳しい記述が、1890年に単著で刊行された『外道哲学』につながった可能性が考えられる。

⁶ 山内四郎「井上円了の学位に就いて」(『井上円了の思想と行動』1987年)。

⁷ 井上円了『外道哲学』(『選集』22:14)。

⁸ 三浦節夫『井上円了の博士論文『仏教哲学系統論』について—井上家から寄贈された原稿をめぐって』、前掲論文。

⁹ 同上、78頁。

¹⁰ 三浦節夫『井上円了—日本近代の先駆者の生涯と思想』（教育評論社、2014年）。

¹¹ 『東洋大学創立五十年史』「井上円了先生略年譜」、514頁。

¹² 高島米峰『随筆人』（大東出版社、1939年）、16頁。

¹³ 三浦節夫『井上円了—日本近代の先駆者の生涯と思想』、前掲書、377頁。

¹⁴ 柴田は哲学館中退で、1928年（昭和3）以後に東洋大学に在籍し、身分は東洋大学教授、役職としては校友会評議員などを務めた。担当科目は倫理学、修身、実践道徳、国民道徳、『伝習録』である。吉田公平「柴田甚五郎旧蔵日本陽明学関係書について」（『井上円了センター年報』10号、2013年）。

（佐藤厚：井上円了研究センター客員研究員）